

## 私の保育

——どこまでも人間として——

藤塚 岳子

### 新しい環境の中で

新しい幼稚園にかわり、この三月で一年がすぎようとしています。前任園とあまりにも環境が異なり、私自身の中にある「自然」もいつとなく冬眠のまま過ぎ去ろうとしています。

保育室から見えた山々、緑の中に建っていた園舎、霜ばしらを手にしてみた冷たさ。たった一年足らずの生活の中で、車・電車の音、緑の少ない自然にすっかりひからびてしまったのでしょうか。

外見からうける自然界には限りがあるとすれば、人間として、あるがままの環境の中で、みつめるより仕方がありません。

昨年に、あたりまえとしてみてきた事柄でも、実に幼児は自然な、素朴な遊びとしてとらえられていることに気がつきました。

また、より深く幼児一人一人の気持ちにせまってみると、今まで肯定してきた考え方にも一歩しりぞいてみなくてはならないことがでてきました。今年一年間の中で、その時々に関心をめぐらせた事柄を整理するつもりで

かいてみようと思いました。

### 内なる感覚を呼びおこし

入園当初は、できるだけ戸外で身体を使った遊びを十分させ、感情を発散させるように努めてきました。幸い当園には、芝生があり白ツメ草、雑草もあり、町の中で育つ幼児たちにもわずかな自然に触れることができるのではないかと考えました。

●雨あがりの日、芝生の上を歩いてみると、キュキュッと実のところよい音が足元から伝わってきました。

「アッ、〇〇ちゃんもいい音するね。」先生もするよ、ほら、キュキュだった。」と足元をみつめながら感触を味わってみました。また、晴れた日には、芝生の上でごろごろねころんだり、追いかけまわったり、草をつんだり寝ころびながら、雲や空をあおいだりしてゆったりとした時間を過ごすようにしてきました。

今まで外で遊ぶことの少ない幼児たちは、一度眠りからさまされると、非常に敏感に自分の体で感じとるようになります。まわりの大人がちよっとした投げかけや、共に行動する中で、感じとっていけば幼児は、実によくみ

ていて、幼児自身の中にとりいれてしまっています。

### 素朴なものとの触れ合いの中で

すがすがしい天候の中で、幼児たちは、水・砂・雑草（主に白ツメ草）といった素朴なものを使って、こね回しています。毎日毎日同じことのくり返しの中でどんな気持ちでいるのだろうかと考えてみました。水は、なくてはならないものになっています。

●白ツメ草と水を容器に入れ、わりばしでつついている幼児、草の原型がなくなるまでつついて青い汁が出なくなると、新しい草を入れてそのくり返しを楽しんでいる幼児。

●草から出る色がだんだんこくなっていくのを楽しむ幼児。

●砂をまぜて、沈澱したそのときを楽しんでいる幼児。

●水そうの容器に沢山の草を入れ、砂をこしょう、塩にみたて、水をまぜて、色が緑から青に変化していくのを楽しみ「よもぎもちをつくる」といって製造過程を三、四人の幼児と楽しんだりしています。

この一連の遊びをみていると、水・草・砂といった

ものが幼児の感情の中にとけこんでいます。それは、変化していくもの、無限に手に入るもの、くり返して同じことができ自分の思うがままになるといったことが考えられます。この遊びの目的は何か毎日、同じことをやっているのではないかなどと四角ばった論理は、幼児の世界では無関係であり、反対に、一人一人の幼児の遊んでいる姿から、楽しんでいっているもの、「何か」をよみとることが大切なのです。

#### 幼児にとって大切なものとは

四、五人の幼児がスコップをもち出して園舎の裏を走っているのが目に入りました。砂遊びでもないのにどうしたのかなと思っていると、手に根つきの雑草を持って息をはずませています。「どうしたの？」と聞くと、「この花きれいやでうめるのやんか。」と返事が返ってきました。私は、根がついた雑草を手にした幼児の顔をみると、やっとさがしあてたといった表情でした。「きれいやで。」といった言葉どおり、実がついていたり、小さな花がついているのであったりしました。雑草でも幼児にとっては、大切なものなのです。

私はプランターを出してきてやり、そこにうえられるように準備してやりました。その日から毎朝、登園してくると草を観察し、水をやっていました。夏休み前まで続きました。

幼児たちにとって、雑草であってもそれは自分たちが大切に根元からスコップでとってきたものであるから、こんなにも息長く観察することができたのだと思います。子供自身の考え、手を使って行動したものは、幼児そのものであるでしょう。さいいな所で幼児は、あらゆるものを自分の体でうけいれていきます。そんな幼児の生きざまに触れることができ、幼児があらゆる「物」をどのようにうけとめていくのかを大切にみていきたいと考えました。

#### 幼児を理解するとは

二学期も半ばになるに従い、一人一人の個性やクラスの中で位置、存在観がはっきりしてきて、遊びの中でも多様なうけとめ方をしなくなっています。

そんな中で、私は、一人一人が生かされている、本当に自分の世界を持って生活しているとは、一体どんなこ

となのかを問わずにはいられない気持ちにさせられました。

“幼児を理解する”という言葉を私はいとも簡単に使ってきました。言葉の上だけでなく保育の実際の場合でも“理解してきた”と思ってきました。

十一月に入り、幼児たちで形の上からもまとまって活動することが多く見られるようになってきて、ふと、感じる事がありました。“理解した”と思ったのは、幼児のある一瞬の側面の姿でしかないのではないかということでした。そして、次のある一瞬には、もうすでにそのものは、変化したりなくなっているのではないだろうかということでした。自分のやっている事、幼児への見方について本当にこれでよかったのだろうかと思ち止まって、過ぎ去った保育のいろいろな場面を振り返ってみました。

“完成した” “続きにする” ということは

一人一人によって違う

● 製作的な活動は、一日では完成せず何日かかかることが多くなります。

少しかたい紙（白ボール）を自分で選択して一人で家をつくり始めました。毎日少しずつやって、四、五日かかってやり終えたようでした。屋根はついていない、内部は細かい部分まで作られていて、台所には、なべ、フライパンなどが、かけられるようにしてあります。カーテンもつけ、ドアも開閉できるように工夫されています。

「先生、もうできた。あそこにかざっておいて。」と叫びました。（あれっ屋根がないなあ）と思いましたが、この集中度から考えてみると限界のようであるし、ここで「もう少し屋根をがんばってみる。」とは言えないのです。そのこと以上に、本人は完成したという意識で、飾るということでピリオドを自分でうったのですから。

● 八つ切の画用紙を何枚かつないで、道をかき次から次へと鉛筆をすすめていきました。一気にかいたといった様子でした。途中で鉛筆の色のこさがうすくなって途中のままにしています。しかし、二度とかこうとはしないし、次の新しい遊びに夢中になっているのです。この幼児のイメージと、かき続けようとするエネルギーとがうまくかみ合わなかったのか、どちらか一方の力が多すぎ

たのかもしれない。

●一人でやり出した町づくりをもう一人の幼児が手伝う形で少しずつすめられていました。教師は、「○○ちゃんえらいね。がんばってつづきの遊びしてね。」と言葉をかけたことで、本当は、自分だけでやりたいことがあったのに何も言わずに形の上では手伝っていました。

ある日、「△△君、今日、あれする？僕、もうやらへんでええやる。」と訴えていました。

教師は、その言葉をたまたま後から聞き、「○○ちゃん、自分のやりたいことがあるのならそれをしたらいいのよ、何もない時だったら続き、手伝ってあげればね。」と言いました。すると、安心したかのように、「ウン。」と言って走っていった。

二学期後半になり、思いやり、友達との関係をより広くもってほしいと願う教師の考えが強くなります。しかし、幼児本来の「自己を充実する」といった基本的なことを押えられるとするなら、何のための願いかかわらなくなってしまう。

幼児が育っていく中で、相手との関係を少しずつ理解していき、自分のわくの中から、外にむけていくことは

大切なことであり、教師も援助していくことは決して悪いことではないと思います。でも、そのことが強く出すぎてしまうと自分そのものがくずれてしまう、とってもデリケートな持ち主の幼児だから、教師がみぬけないといけないと思います。

以上のような事柄があり、幼児にとって完成したものと、続きものとは幼児自身が決定するものであるということです。教師自身のものさしでみてしまっただけではないということですが。

又、教師の考えの中に、一つのことをやっていたらそれを完成して次のことに移ってほしいというものがあります。しかし、幼児をみているとそんなものではないらしい。昨日まではその事が一番やりたかったことなのでしょう。一日たてば、一時間たてば変化しているんだという考え方にたてば、当然のことといえるのではないのでしょうか。

表面的にみると、あきっぱいと映るであろうが、持続の内容は、一人一人によってその表現の仕方が違うでしょう。又、幼児をとりまく友達関係によっても違うだろうと考えています。やり出したものを納得のいくまでや

ろうとする幼児、友達の動きに合わせて、いつ続きの活動をするかを決めようとする幼児、新しいイメージを先行してしまふ幼児などさまざまです。

言葉で「完成する」「続きにする」と言っても多様なうけとめ方をする豊かさを持ちえたいと考えています。

### 幼児一人一人のリズム、テンポに合わせて

●幼稚園でこそ、のんびりとした時間空間を確保してやらなくてはいけないし、心理的空間を一人一人に十分持たせることができる場でありたいと考えます。

●いつもまっしぐらで、集中ばかりしていたら、早くできてもさびしいと思います。ぼーとしながら、探し求めていくようなゆとりのある時間を確保してやりたいものです。早くできることは悪いことではないが、幼児期は、時間の区切りのない地平線上においてやりたいと思います。

●保育の中で、自分の世界を持ちその中で充実させていけば、幼児は大人にすべてを投げ出してくれます。

●幼児の意志で、その時に感じたことを即、行動に移すことができる時間的空間があるということは大切なこと

です。

●劇的な活動の中で、自分の配役をとる時はもう自己中心で、火花が飛び散るほどです。同じ役に希望が集まり、仕方なく他の役をやりながら、二回目、三回目の役まで待つことができるようになってきています。

「次は自分が○○の役になれるのだ」といった気持ちと他の幼児が演ずるのを見て思っているのだと感じます。

「二回目は、私が○○やでね。」と周りの幼児に認めてもらおうとしています。同じ劇であっても、幼児が「私は○○をやりたい。」といった気持ちを満足させる時間を与えてやりたいものです。

●劇の中で、後半部分しか登場しない幼児に対して、(今は、何もしていないのだから手伝ってあげて)といった考え方はしてはいけないなあ。空白の時間、それはその幼児にとっては、劇の中の時間なのであるから。

こんなことを思って一人一人の幼児をみつめていると幼児のやっている行動の裏には、その幼児の意味、存在観があるのだということを改めて感じました。

## 幼児の失敗したものを、ゴミ箱に

すてられているものから

毎日、何かをしている。一つのことをするのに、いろいろな試みがなされています。その幼児の過程をたどってみると、とてもゆかいになったり、何とも言えぬ気持ちになります。

●ほとんどできあがっている状態のものであり、くしゃくしゃになっています。どこが気にいらなかったのかわからないが、その幼児にとってはだめだったのでしょう。

●小さく切りとられたものをみると、幼児がチョキチョキ切っていくその気分ちが伝わってくるようです。

●何枚か同じものがかかれてあり、部分的に鉛筆の力の入れ方が違っています。その幼児が？ したい？ したがっているところが見えてくる思いです。

●いっぱいいろいろなものがかいてあります。頭の中がいっぱいだったものをはき出したほどです。さっぱりしてもういらなくなったのかなあ。

こんなことをあれこれと考えていると、幼児の生活は、あらゆるところで、そのぬくもりが残っているんだなあと感じてしまいます。

教師が、一人で保育し、支えきれない部分を、一日の保育が終わった保育室で思いめぐらしていると、一人一人の顔とその時の情景がうかんできます。

無言のひとときを味わえる自分ではない、そんな心のゆとりを持っていたいと思っています。

(三重県・桑名市立修徳幼稚園)

